

皆さん、授業参観しませんか？

令和7年6月30日

生徒エージェンシーを育てたい！

OECD（経済協力開発機構）は世界38カ国が加盟する国際機関です。世界中の課題を克服するため、ここでは、「自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく力」=エージェンシーが求められるとされています。難しい言葉ではありますが、そこから教育の現場においても、生徒エージェンシーを育成していくことは大切であるとされています。学校で言えば、「自分の将来の目標を見据える力」「現状に疑問を持つ力」「批判的思考力」もっと、噛み砕けば、「自分の将来を、責任を持って、自分で考えることができるチカラ」と言えるでしょう。これからの高校生は、大人は答えを用意できない社会で生活することになります。今こそ、高校生段階から生徒エージェンシーを意識させたい。今、社会への出口にとっても近い本校だからこそ、そう思っています。

「授業をみる」ことを通して、生徒一人一人の学びを想像する。

私は、30代の頃、ある大先輩の先生から、「授業をみる」ことを勧められました。どんな授業でも、必ず何かある。それは、楽しい授業、学びがある授業、難しい授業、面白い授業、生徒が活動している授業など、自分で見てみるといい。（その先輩は、気づくまで見せてもらいなさいと。）それをいっぱい引き出しに収めておくことが、あなたの授業力になると言われました。そのためには、授業参観をし、生徒を見なければダメだと。授業の中で、生徒の背中、横顔、表情、筆圧、会話どこでも良い。そして、これには終わりが無い。それをやめたら、授業力はどんどん下がっていくと・・・。

本校では、前期後期と、1か月授業参観期間を設けています。ぜひ、授業参観しましょう。この1か月授業見せていただき、ありがとうございました。少しコメントさせてください。他にも、幾つも載せたいのですが・・・

湯川先生「ビジネス基礎」、ベテランらしく、生徒を惹きつけるトークと、生徒に寄り添った発問で、50分間があったという間でした。高度情報化社会における情報とは何か、生徒と教員の情報量（知識）の差が小さい分野で、基礎を押さえながら授業構成が工夫されていて、最後に5分の society5.0 文科省作成動画で「ほっこり」とまとめられました。寺島先生「NIM 和と必勝法」というゲーム的要素を取り入れながら、2進法とその先にある情報のデジタル化について授業が展開されました。生徒の実態を見ながら、7つのグループを上手に運営され、最後の問いに導いていかれました。論理的思考力が問われ、多くの生徒が、自ら考えて、自らの考えを言う様子が見られました。望月智美先生「What has happened recently?」、授業のルーティーンが確立され、生徒が安心して、（当たり前のように）英語でコミュニケーションをとっていました（次が予測できる）。テキストに沿って進みながら「なぜ? Why?」「なぜならば、Because」で会話を試みていて、論理的に会話する基礎が見られました。竹本先生「江戸幕府の衰退」、先生の教科愛が溢れていて、聞いている生徒の中にも、きっと歴史が好きになる生徒が出てくるだろうなあと推察しました。長期に渡った江戸幕府の政治的安定は、今の日本のこれからを考える上で、さまざまなヒントを与えてくれるでしょう。「政策」「法令」とは？言葉の定義について、大人になってもしっかり考えるべき視点を示していました。勝亦先生「微分法」、先生は、あまり話さない。待つことをした上で、コンパクトなアドバイスを入れる。授業のデザインが良いと感じました。3展開で授業が構成され、1→2→3（1を使い2へ、1.2を使い3へ）と、生徒は論理的思考を学ぶことができるだろうと「教科数学の見方考え方」をイメージできました。佐藤れい子先生「新しい発見」、論理国語の授業ですが、実は見るのができませんでした。が、授業展開が非常に工夫されていて、思考力、そして判断して「書く」力を育成できる構成になっていましたので、紹介します。「生物の生存戦略について」のプレゼンを、『敗者の生命史38億年』著稲垣栄洋の評論を読んだ上で作成するという授業です。興味湧きませんか？（興味深い授業はまだあるので、次号で続けます。）教職員（事務も含めて）の皆さん、保護者の皆さん、生徒の様子を見て、どんな学びがあるか想像してください。一人一人が本能的に持つ「学びに向かう力」を引き出せたら嬉しいですね。

全ての授業を見ることができず、本当に申し訳ないです。今後もさらに授業の様子を見ていきたいと思います。

能力は個人に備わったものではない！他者との関係性が大切！

『能力主義をケアでほぐす』著：竹端寛（2025）晶文社 をある講演で紹介されたことをきっかけで読みました。たいへん面白かった。

著者が、子育てをしながら、読書や社会的事象を自らの視点で捉えて書いた思索エッセイです。通底しているのは「ケア」論。ケアは、色々な分野で定義されますが、基本的には「人間としての存在」を大切にすることです。医療分野のがん患者への緩和ケアが広く知られているでしょうか。

例えば、著者は、「努力すれば報われる＝努力しないと報われない」という日本人にとっては馴染みの価値観がある。この価値観は、努力の「機会の平等」を前提としている。だが、この前提はちょっと考えると怪しい。（中略）これも書いてみたら当たり前なのだが、不覚にも僕はこのことに、子育てをするまで気づけなかった。（中略）僕は、赤ちゃんを抱きながら、娘から突きつけられたのは、他ならぬ目の前にいる娘の「個別性」に、お父ちゃんとして関わる僕という「個性」がどう向き合うか。である。（p67）

また、「まっすぐなキュウリ」（キュウリはまっすぐに矯正される）について、本当は誰だっていびつさや曲がった部分があるのがあたりまえなのに「まっすぐなキュウリ」のフリをしないと排除されてしまうこの日本社会の現状こそが、親と子の生きづらさの背景にあるのではないか。（中略）社会構造こそ、変えていかなければならないのではないか。そんなことを、つらつら考えている。（p150）私自身をメタ認知できる良い本でした。

エッセンシャルワーカーとは

『ホワイトカラー消滅 私たちは働き方をどう変えるべきか』著富山和彦（2024）NHK 出版新書では、デジタル化を軸にした世界の構造的な変化に関し、特にローカル経済を支えるインフラに注目する。昨年11月、建設業界は求人11.2万人に対し、求職者は、1.8万人、情報・通信や看護師など専門職は求人36.9万人に対し、求職者は17.8万人。それに対して、事務職等は、求人13.3万人に対し、求職者30.5万人である現状から、特に高校普通科→大学進学の「当たり前」「とりあえず普通科、4大」のバイアスをどうかしないと、子ども、日本人の働き方が危うい。

著者は、「エッセンシャルワーカー」とは、人々が最低限の生活、あるいは快適な生活を維持するために欠かせない職業を指し、代表的な職種として医療、介護、交通、インフラ、物流、公共サービス、小売り、農水産に従事する人々が挙げられる。（中略）

エッセンシャルワーカーは、直接人々に対して付加価値を提供し、その対価を受け取る。感謝の言葉をもろうこともあれば、罵倒されることもある。質のあるモノを扱い、生身のヒトを相手にしている仕事だ。また、どのような状況であっても、たとえばコロナ禍など社会が混乱しているさなかでも人々の生活に必要な仕事である。（p72）そして、このエッセンシャルワーカーに対して、相当の対価を支払う社会に変化せざるを得ないという。実はここにDXが登場する!!私たちは、時代を先取りできているのか、機械いじりをDXにしていないか、高校教育の在り方も考えさせられ、社会の大きなうねりを感じる新書でした。

陸上部・相撲部・男女ソフトテニス部・自転車競技東海総体参加

6月20日から22日まで、東海総体が三重県を中心に行われました。本校からは、静岡県予選を勝ち上がり、陸上部、相撲部、男女ソフトテニス部、自転車競技（市川さん全国へ）で参加しました。選手は全力を出し切り、頑張りました。静岡県から、東海4県へ、そして、全国へと、仲間が参加することによって、「私たちにもできる」という意識が広がります。これが学校全体の意識を押し上げていくと思います。おつかされまでした。

総合的な探究の時間での1コマ

2年生の総合的な探究の時間（タンタンタイム）で、課題設定について、話をさせてもらいました。「課題」と「問題」の違いから、課題設定の鍵は、「各教科」の学びの中にあることを伝えました。行動可能なこととは何か考えて、良い課題設定をしてください。



職員室です!from フィンランド